遊ぶ会
河原版
第２号
１９９１.９
発行

代表・編集
野川で遊ぶ
まちづくりの会
依田Tel 0424(80)8861
尾辻 03(5384)5539
内藤 0424(89)9351

速報・野川流域ネットワーク調布で開催!!

（記載は、最終ページにあります）

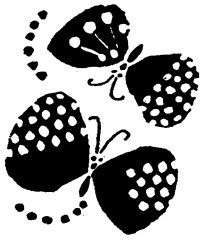
「虫が嫌いになってきた」 依田 輝男

先日、勤め先近くの乃木児童公園で油蝉を捕まえ、近くをお母さんと歩いていた五、六歳位の男の子にあげようとしたら、泣き出してしまいました。私の周囲でも、トンボが怖いとか、魚の目が怖いという子供たちが増えています。私自身は山奥の農村で育ったので、あらゆる虫や魚たちはごく親しい存在でした。毛虫や蛇、むかででも、刺したり噛んだりしない限り拒絶反応はありませんでした。

そういう私でさえついこの間、見慣れないバッタが部屋へ飛び込んできて、何かおぞましい気分になりました。これは一種の人間性の危機というか、生き物性の危機ではないかと思うのです。異物に対しての許容量が狭くなってきているのです。都会暮らしの長い人間に、一般的なこのような現象は無意識下のこと、皮膚感覚に属することだけに、よけい根が深いとも言えます。

・胸毛や足の毛を剃り、筋肉隆々よりも細身を好む。その上毎日朝シャンをし、体臭まで消そうとする「不潔恐怖症候群」というべき感覚は、生き物（動物）である自分の否定であり、より無機質に、抽象的存在になりたがっているようです。そういう人たち（私たち）が公園の毛虫を許せないと消毒剤をまき、落ち葉を毛嫌いし、土を嫌ってコンクリートで固める。川が蛇行することさえ許しておけないと直線化してゆく。そして、虫も棲めない公園、魚も棲めない川で人間も精神的にも肉体的にもむしばまれてゆく、これは悲劇でしょうか、それとも喜劇でしょうか。

こういったことを考えると、私たちがこの三十年間必死になって、経済効率のために「無駄なもの」として切り捨ててきたものをふたたび取り戻すことが大切になってくると思います。それは、虫がいて、名も知らぬ草花が咲き、水たまりにはおたまじゃくしやめだかやげんごろうがいて、道端にはレンゲが咲いている。そしてその周りを悪ガキが駆けずりまわっている、あの懐かしいことどものことなのです。



「ふるさとの川」

尾辻　義和（野川で遊ぶまちづくりの会　代表）

府中崖線からこんこんと湧きでる水を集め流れていた野川は、東京オリンピックの前後から流域に移り住む人が急激に増え、自治体の下水道整備が追いつかないままに、下水の流入を余儀なくされました。深大寺の湧き水で稲を作っていた農家の方の話では、野川はもちろんのこと、深大寺の湧き水を集めていた用水路（当時は素堀り）でも泳いだということです。その湧き水が減り続けるのと平行して、流入する下水が増え、野川はまさに下水道そのものになってしまいました。また、下水を集めて流れるようになった野川は、大雨にはよく氾濫する川となってしまいました。

崖線の湧き水の灌養地域の都市化によってきれいな水を奪われ、かわりに汚水を流され、野川は上流では三面張りになり、死の川になる運命だったのかもしれません。しかし、流域に住む住民が野川に清流を取り戻そうと運動を始めたことにより、神田川や目黒川のような排水路になる運命は避けられました。野川は下水の流入が抑制され、僅かの湧き水を集めて、辛うじて生き延びています。清流に住む魚も見られるようになり、上手に手を加えていけば、生き物を豊かに育む自然度の高い川になるのは間違いがないと思います。一度は自然の力を失った野川ではありますが、自然の力には人間のそれよりもはるかにすばらしいものがあります。自然の力を利用してより安全で、より自然に近い野川を再生することは可能なことです自然と共に生きるほうが、どれほど人間にとって快適であるか、今一度考えてみてはいかがでしょうか。

さて、一難去ってまた一難とは人生にはよくあることではありますが、野川にも安心できない事態が待ち受けています。関東村跡地に建設が予定されている汚染処理場の排水路として野川が利用されようとしていることです。これは野川にとって致命傷になるかもしれません。今度こそ、排水路になってしまうのでしょうか。玉川上水では、「きれいな」汚水処理水を流して、復活といっているようですが、本当に元の玉川上水に戻ったのでしょうか。

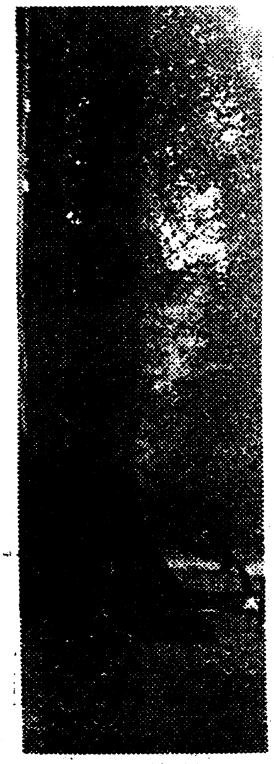
都会にはふるさとがないといいますが、これからのこどもたちが野川をふるさとの川と呼べる川にしたいと願っています。

会員を募集しています

野川を中心に小さな生き物の視点から、都市の自然を考えていきます。
魚・昆虫・草木、そして、自然と遊ぶことの好きな人…参加しませんか？
年会費一０００円　イベント企画（世話人）・学習会・会報あり

「野川は清流になったけれど」

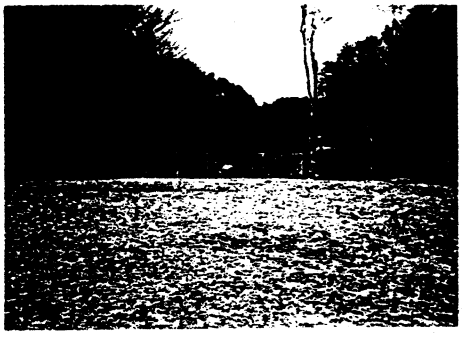
三多摩問題調査研究会副会長
若林　高子



久しぶりに調布と世田谷の野川を見てまわった。そして、今から１５年以上も前に、湧水量調査をした頃との相違に目を見はった。かつて、今の深大自然広場のあるあたりは、ゴミなどが散乱し、野生のニワトリがいるだけの荒れ野であった。

今、野川は行政の目玉商品なのだろうか。水辺の時代といわれ、環境問題がやかましくなって、たしかに野川は清流になったし、はけの森の保全も進んでいる。湧泉が生きているのを見るのはうれしいし、いろいろと良くなったことは評価したい。

しかし、これは一体なんなのだ！と言いたくなるようなことも結構ある。地下水脈をズタズタにし、コンクリ移植や巨石手術によって、せっかく生きている野川を死に追いやるような工事が、住民の反対にもかかわらず、あちこちで行なわれてわれている。



その後、一度も行かなかったのは怠慢でしかないが、自然広場は見事に整備され、野草園やホタルの小川もできて、調布市の取り組みのほどがうかがわれた。また、世田谷のみつ池から出た湧水も、せせらぎ水路を通り、野川へ流れ込むように整備されていた。「野川を清流に」の運動を始めた頃には、なかなか理解されなかったことを思い出す。

誰もが生きている野川を望んでいるのに、どうしてこういう改修が行なわれるのだろう。多くの市民の勢力で、魚が住み、野鳥が飛来し、ホタルがよみがえってきている野川ー特に水際の魚や虫にとって大事な場所が、無神経に掘り返され、石のギブスをはめられていく。人間の都合だけで川を改修するのではなく、鳥や虫や魚の声も聞いてもらうにはどうしたらよいのだろう。皆で考え、働き掛けていかなくてはーと思う。

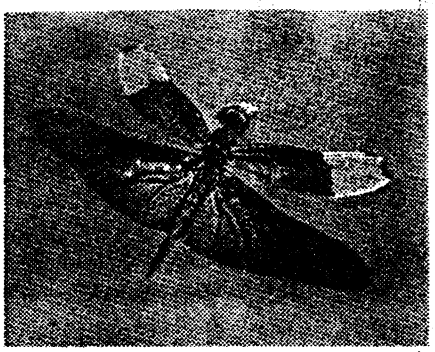
トンボの不思議な能力

狛江市　上村　佳孝　（中３）

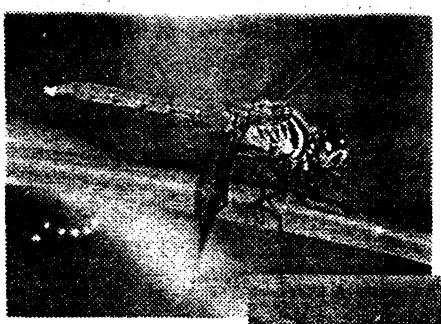
３年間、網やカメラトンボばかり追い回ていると、トンボのつ不思議な力に驚かれることがしばしばります。

例えば、日本一大きトンボのオニヤンマ　南国からはるばるってくるウスバキトボ、これらを捕まえうとして、網を持っ待っていると、他の頭をかすめて飛んきた彼らが、僕のところを避けるようにして通りすぎていきます。それもちょうど網の長さだけ離れるのです。網を振ったり、構えたりせず、網を抱き抱えるようにして持っていても彼らは同じ距離だけ僕から離れて飛びます。どうして網を持っていることが分かるのでしょうか。まったく不思議な能力です。

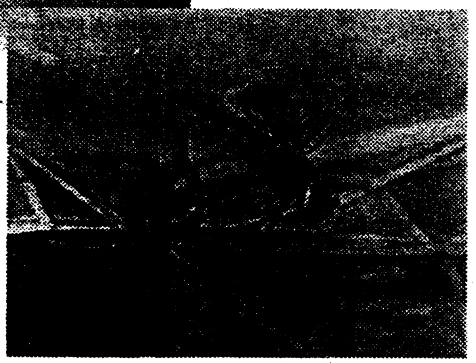
また、トンボの「学習」ともいえる行動を見ることがあります。写真をとるとき、僕は「ぬき足、さし足」で近寄るのですが、少し気が散ってしまったりよろけて体勢がくずれると、とたんにトンボは逃げてしまいます。これを同じトンボに２～３回、またはそれ以上繰り返すのです。そして、やっとのことでトンボから30cmくらいのところまで接近し、１枚撮影すると、今度はちょっとやそっとのことでは逃げなくなります。相手が自分に危害を加えないということを学習したのでしょうか。ひょっとしたらトンボはとても賢い昆虫かも知れません。僕がトンボを観察する以上に、ひょっとしたら彼らは私たちのことを観察しているのかも知れませんね。



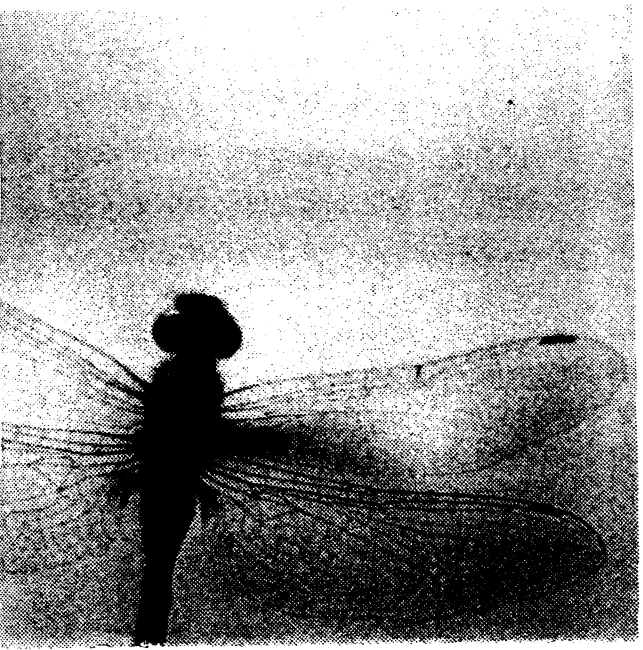
チョウトンボ



マイコアカネ



オオギンヤンマ♀ 単独産卵



野川と湧水の魚たち vol 1

東京都では絶滅してしまった魚を最初に紹介するのも気が引けますが、湧水と野川を語るうえでは忘れてはならないものです。姿はアジとサバを合わせたようで奇妙ですが、湧水がなければ生きられない4～5cmの小さな魚です。トゲウオの仲間はイトヨ（糸代）とかハリヨ（針代）とか家庭的な名前がついています。これは水草で、鳥の巣のようなかわいらしい巣を作り、子育てをするからでしょう。

泳ぐ姿もヘリコプターのようでかわいいのですが、ゴルフボール大の巣を守る姿には心をうたれます。人間が湧水を大切に利用している所に住んでいるのも不思議です。

全国でも生息場所は一か所のみになってしまい、絶滅も時間の問題です。

各地で湧水の保全が叫ばれていますが、武蔵野の湧水に戻すことは出来ないのでしょうか。

水族館で見るだけでなく、小さな小さな生き物の声にも耳を傾けてあげたいものです。(N)

ムサシトミヨ（トゲウオ）

90'5.
さいたま水族館にて.

上野村環境ミーティングの呼びかけ

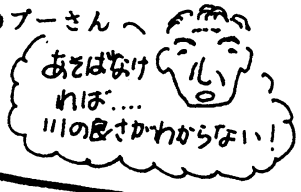
川楽（かわら）の会（けんじゅう）

秩父より車で1時間、長野県と埼玉県の県境に囲まれた小さな山村、群馬県奥多野郡・上野村。この村に会員の本木さん（小金井市・カレーショップ経営）が小さな家を借りました。それをいいことに、会員の家族が入れ替わり泊まり、この夏、ついに究極の『川遊び研修会』が勝手に開設されました。

都民の水道水の源泉であるという理由から、7割近い家庭に雑排水処理槽（ざつはいすいしょりそう）が取りつけてある意識の高い村です。村長みずからカジカの減った原因について考えているところなんて他にありません。

川が生きています。来年はぜひ、大人も子供も集まって、川遊び学校をやりましょう！もちろん、紅葉は原生林ですからスバラシイけど…

問い合わせ：0423-83-3381　カレーのブーさんへ



～野川で遊ぶ・第２回～　　７月２８日

親子で…　# 生けどり大作戦！　野川・水辺の憩い広場　参加者：７８名

「自然保護だ…なんて言って、生け捕りとはケシカラン！」そんな苦情が会にも寄せられました。確かに過激なネーミングです。捕った生き物は再び放流することを付記しておいたのですが、「川で遊ぶ、魚や虫をつかまえる」といったことに対する抵抗感は想像以上に強いようです。それでも、川らしくなってきたといわれる野川にどんな魚が戻ってきたのか、それぐらいは知らなければ、川について考えることはできません。

『水辺の憩い広場』は、今まで高いフェンスに囲まれた野川の一部分を東京都の親水化事業によって整備されたものです。（通称・武蔵野市場前）実はこの場所、改修工事以後、野川の中でも最も川らしさを取り戻していて、君塚芳輝さん（調布在住の魚類学者）も注目する所でした。ところが、今年の正月から何億という巨費を投じてブルドーザーが入ったものですから、生き物への影響も心配されたわけです。（会との関わりは『河原版・創刊号』のメモを御一読を）

梅雨明けの最初の日曜日、新聞の呼びかけを見て予想を上回る数の親子づれが集まってくれました。専門家の君塚さんが急きょ魚や川の講義をしてくれたり、投網の技術を持っている方が実演をしてくれたりで、盛況の一日でもありました。

「魚と追いかけっこをするのではなく、かくれんぼをする気持ちで…」という単純なアドバイスだけで３０分もすると水槽が満杯になるほどの収穫でした。ほとんどが放流されたコイやフナですが、金魚や錦鯉を除いても７種の魚が確認できました。

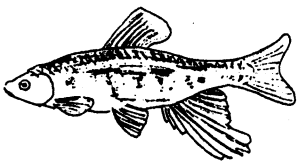
工事が終ったばかりだというのに、多くの魚が戻ってきているのは、工事区間が400mと短いのと伏流水（ふくりゅうすい）が豊かで推量が多いためだろうと考えられます。特に、放流コイの多さには驚かされましたが、あれでは水草も水生昆虫も、小魚も食べ尽くされてしまうでしょう。

多くの人が１、２時間で飽きてしまったことも意外です。変化のない池のようになってしまったからかもしれません。

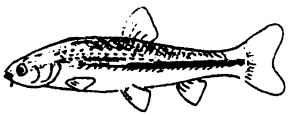
「魚をいじめるな！」と真剣に抗議に来た方の言葉の中で「もし川が溺れても、魚を助けるのは役所に任せておけばいい。」と言われたのが印象的です。30年間、都市生活と川との関わりがないうちに、強固な自然観ができつつあるようです。整備されてきれいになった川を見て、一抹の不安も感じました。　（内藤　茂）

採取した生き物

○モツゴ（クチボソ）
○コ　　イ
○キンブナ
○メダカ
売っているヒメダカではありません。１７匹の群れ
○オイカワ（ヤマベ）
鮮やかな色で、泳ぎ方も速い。少年が優しく手掴みしました。



○タモロコ
西日本の魚です。

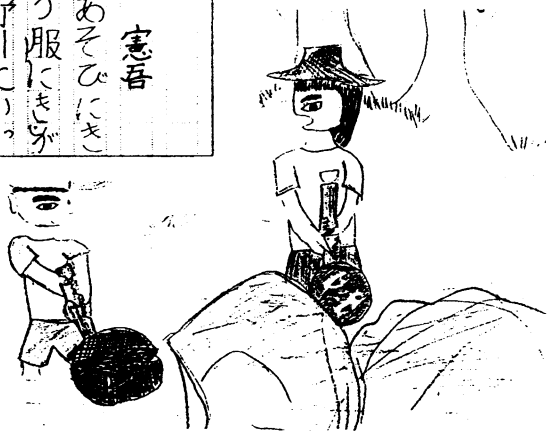


※他、最終はできませんでしたが、ドジョウ・ヨシノボリ・ナマズがいます。

親子でどろんこ生けどり作戦

三年二組　鯉江　憲吾

調布のおばあちゃんちに、一家であそびにきていて、7月28日の朝いらないよう服にきがえて、ビーチサンダルはいて車で野川にいったらはだかになって、およいでる人がいました。鯉やめだかがいました。ぼくは、すべって、「バッシャーン」ところんでしまいました。お母さんが、いっぴきつかまえてしまいました。お母さんの顔がうれしそうに、にこにこしてました。岩ばの所に魚がはいりました「しめた。」あみをそっとそっとちかずけて見てあみを魚のしたから「えいっ」すくってみたらあみの中に赤い鯉が、あばれてみしぶきをたてて、いまにもあみからでそうでした。ぼくはこんなにいっぱい魚がいるのでらい年もやりたいです。帰りには、とった魚は、かわいそうなので全部川に、かえしました。



遊ぶ会　川あそびスクール（群馬県・上野村）

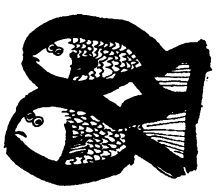
狛江四中　二年　増田　尚美

父の提案で、三日間、上野村へ川遊びに行きました。上野村といえば、日航機の墜落の事しか知りませんでしたが、すばらしい川が広がっていることに驚かされました。

中でも心に残ったのは、父と、本木さん（会員）、そして私の三人で協力しながら浅瀬に鮎を追い込んでつかまえた事です。それ程、大きなものではありませんが、パシャパシャと水をとばし、とてもイキのいい魚でした。自分の手でつかんだ時、そして、鮎だと教えられた時、本当に感激しました。

しかも、一日目に、一ぴきもとれなかった私が、なんと、その時、カジカを三ぴきもつかまえたのです。冷たい水につかって粘ったかいがありました。

帰りの電車の中で、山嫌いの私が「また来たい！」とこぼしたので、家族が驚きました。上野村の川は、私の価値観を変えたのです。川でどろんこ遊ぶことのできた上野村の川を心から好きになりました。



「足元を掘れ。そこに泉が湧く」

調布　大西　友幸　高3

「足元を掘れ。そこに泉が湧く」と僕の学校の地理の先生はいって、毎年夏休みになると地域研究のレポートを宿題にしました。でも中学の頃、僕は自分の住んでいる地域を単に「つまらない住宅の集まり」としかとらえていなくて、「泉が湧く」ようなことはありませんでした。うちの学校は、過熱気味の受験戦争をくぐってきたやつらの学校で、彼らによると調布を含む多磨地域は「田舎」とされていたからかも知れません。調布市内の小学校出身の僕としては初めはそんな考えに反発を覚えましたが次第に染まっていき、中学卒業時にはブラックマンデー以後の株価上昇に湧く社会を背景に、将来の金儲けに対する野心にふくらんだ少年になっていました。

そうして同じ名前の高校に上がり、夏休みの宿題の事を考えていた5月、「野川流域環境保全協議会」発足の新聞記事が目に入りました。「そういえば、小学校の時以来、野川にあまり行っていないな。野川調べてみるのもおもしろいかもな。」と思い、野川を調べることにしました。

以上が、僕が野川を「再発見」したいきさつです。たいして「自

然環境」などには興味のなかった僕でも、野川公園で本当に地面から水がごぼご湧いているのには驚かされました。それからこの1年間、野川にかかわってきた人の話を聞くうちに、その人たちと自分との違い、更には僕が野川に関して一番興味をもっていたのは何かがわかってきました。僕の野川に関心を持つようになった動機も、今持っている興味も、社会的、地域的なものだという事です。僕はあまり生き物のことはよく知らないし、「文系」人間だからなのかも知れません。

受験勉強にも少々疲れ、たまには野川にでも行きたくなった今頃ですが、調布のみなさんは、しっかり足元を掘っていってくれるよう期待し、また願っています。

あの頃のフツーの悪がき

『おじさんの話』（今回は匿名希望）

あの頃の子供たちは、農家の人にとってみれば、猟銃で撃ち殺してしまいたいほど憎たらしい存在だったろう。

特に、坂上の爺様と近所のガキは天敵のような関係にあった。鶏小屋の戸が開いていた、という理由だけで500mも追いかけられた奴は、恨みを晴らすために爺様が大事にしていた椿のつぼみを全部もぎ取った。

秋は栗。爺様の家の栗はでかい。鉄条網と金網でがっちり守られた栗林に、みんな知恵を絞って入り込んだ。身体がするりとすり抜けるほどの穴を開けて、獲物を略奪する。逃げる時のために穴も小さくしておく。爺様が外まで出てこれないようにするためだ。知恵比べは、毎日続いた。

夜になって、そっと家を抜け出す。囲いにはすでに穴が開けられていて、目を凝らすと小さいガキどもが

蜘蛛のように地面を這いずり回っている。拾っても拾っても頭上から栗が落ちてくる。夜明けの兆が見えた。急がねばならない。よろけるほど栗を拾った奴もいる。皆、満足感で笑いをこらえているのだ。そそくさと穴から退散しようとした時、先頭の奴が棒立ちになって、栗を地面にバラバラとばらまいた。穴の前に爺様が仁王立ちに立っていたのだ。一網打尽…

ザリガニもよく取った。田の畦に小さな穴があり、真っ赤なザリガニをねらう。

ある時、肩まで手を突っ込んでいたら、穴からチョロチョロ水が出てきてしまった。慌てて草や土で穴をふさごうとしたが、時すでに遅し。穴からの流れは、30cm幅の流れに広がっていた。こういう時には逃げるに限る。田植えの終わったばかりの田んぼだったが、その後どうなったか私は知らない。

野川で泳いだ後のスイカは大変うまい。ガキどもは競ってスイカをちょうだいした。品定めをしている暇なんかないから、ラグビーよろしく目についたスイカを持ってダッシュする。スイカ泥に悲鳴を上げた農家が監視小屋を立てるころ、野川の夏は終わる。昭和22、3年、おじさんが小３の時の話だよ。

国分寺市民が、共有し、触れあえる緑地と遊水を！

テラ・フォーム　21
三田村　慶春

国分寺の街から川のせせらぐ音を耳にしなくなって久しい。私たちの街、国分寺では「河川」という言葉は死語に近く、古くには市民の生活を支えていたであろう「野川」という固有名詞もほとんどの市民からは忘れられてしまっている悲しい存在である。

昭和40年代の高度経済成長に伴う急激な人口流入を補うため市のおよそ4分の1を占める農村に手をつけない形で野川の両岸をなめるように宅地化し、それを追うように治水、安全管理、臭気などの生活環境改善対策として、源流の一部を残してコンクリート護岸として固めてしまった結果と言える。

橋の欄干にもたれて、行く川の流れに人生を映す人影もなく本来なら川の周辺に展がる森や原っぱなどの自然の中で育まれる小さな「いのち」たちも棲み家を追われてしまった。
現在に至っても野川は「ドブ川」以上の扱いを受けていない淋しい流れなのである。

これは農地の存在、農家の経営を無視して行政運営をし得なかった国分寺の限界である。新住民を受け入れ都市化するにも拘わらず、農地には不必要とされた下水道などの基盤整備の遅れ、土地を持たない新市民の自由な自然空間としての公共地確保への欠如などに著しく見ることができる。

一方では「水と緑の国分寺プラン」作りや「農のあるまちづくり」など国分寺の取り組みが華やかに他市に伝わっているようだが、これらの都市農地、緑地、水系はあくまでも「垣根の向こうに広がる地主の土地」にあり、私有空間であって多くの市民の共有空間ではあり得ない。

国分寺崖線の上に位置する旧国鉄の鉄道学園跡地がやがて払い下げられる。市の中心にある30haもの未開地は誰にとっても魅力を秘めている。しかし、いたづらに高層の住宅(市民には手のでない価格)などを配慮して野川の源流を涸らすことがあってはならないし、そのためには治水、利水の河川思想から、保水・遊水としての河川思想を行政の根幹として据えた「まちづくり」のプログラムを創造することが急がれる。更に言えば、国分寺の魅力の一つでもある農地には私有、共有思想を超えて、多くの市民が農耕を体験し、自然と触れ合える「共有・共耕農地」の考え方と制度づくりを創り出したいものである。

調布周辺の
蝶とトンボの写真展
ー小さな生き物から見た調布の自然環境ー
※十二月より中央公民館にて開催予定。
興味のある方の準備手伝い大歓迎（連絡先・表紙のところまで）

「橋と野川」

野川に親しむ会
増田　昭

かつて、ある作家が「すべての橋は詩を発散する」と彼のエッセーに記していますが、ときに私も、橋には川以上の親しみを感じることがあります。小川を渡る丸木橋から海峡をこえる鉄橋にいたるまで、橋は不思議な魅力を持っています。右岸から左岸へ人を渡すだけの、その機能のこの上ない明快さが、複雑さの中に疲れた心を打つのか、石なり鉄なり木なりで、もっとも単純な形で人間を主張するその単純さが魅きつけるのか、橋をとりわけ長い橋を渡る時に、橋下を流れる川がどんなに汚れていても、心のなごみを感じるのは私だけではないと思います。

下町育ちの私にとっては、とりわけ古川や日本橋川のような、都会を流れる川に架かる橋が好きです。これらの川に架かる橋は関東大震災や戦火に耐えて残っている橋も沢山残っており、それぞれに石橋、鉄橋と素材は違っていても、風雪に耐え、決して目立たず風景にしっとりとなじんだその姿は、そこに存在しているだけで、雑踏の中で唯一の心の安らぎを憶える空間を維持しています。日本橋や隅田川に架かる橋は、今も昔も都市景観のひとつのシンボルとして有名ですが、これらの古い橋もよく見ると、親柱（橋の名前が書かれている端柱）や高欄に工夫がこらされていたり、人が休んだり、小休止をできるちょっとした橋詰広場があり、設計者の苦心と心いきが伝わってくるように感じられます。また、それぞれに工夫を凝らした意匠なりは、その時々の文化を感じ、時代を越えて周囲と調和する姿は、優れた建造物は５０年先の景観をも考慮するという言葉を証明しているようにも思えます。

振り返って、私たちの住む野川に架かる橋を見ると、すべて何の趣もない、鉄板を並べただけの無味乾燥な桁橋ばかりで高欄についても、スチールパイプの形状の違いと、表面に塗布したカラーペイントの違いがわずかに橋に個性を与えているだけのように思えます。野川にこのようなどこにでも架かっている桁橋しか存在しないわけは、たぶん野川が、郊外を流れる川で古い歴史を持ちながらも近代史の中でその中心に直接架からなかったことと、橋そのものがデザインになり、景観を重視する建築的構造物から、土木主体の河川対策の一環として単なる鋼構造物となったことではないかと考えますが、ここまで素晴らしい水辺空間を育んできた野川なのですから、もう少し景観と調和した、用と美を備えた橋を望むのは、私だけではないと思います。

遊ぶ会活動メモ

5月19日	学芸大地球環境科学科助教授小川 潔氏訪問。
5月25日	やぼ耕作団見学、明峰氏と交観。
6月23日	日野の湧水、用水の見学の後、横浜かわを考える会、やぼ耕作団と交流会。
6月30日	荒川トンボ池見学。 下町緑の仲間たちと交流会。
8月 5日	本牧トンボ池、瀬上市民の森見学。 横浜環境科学研究所森 清和氏案内による。
17日~19日	群馬県上野村で環境ミーティング。
26日	筑波学園研究都市ミニ農村、トンボ池訪問。 （守山 弘氏の案内による）

○野川流域ネットワーク情報

小金井市議会では９月の本会議で、野川第１、第２調節池の利用について「わき水を利用しての池と小川づくり」についても一括採択した。河川敷はグランドとして利用する、という旧来の定石にこだわらず、野川の自然を生かした活用に期待がもてるものとなった。どう活用するか、ひろく流域市民のアイデアにかかっていると思う。

（陳情者：本木・内藤）

9月8日午後2時台風のさなかにもかかわらず野川流域の市民団体12計28名を集めて野川流域ネットワークが調布ヶ丘地域センターで開かれました。野川の問題に長年取り組んで実績のある団体から、できたてのホヤホヤの団体（何をかくそう私たちの会）まで入り乱れて熱気のある会議となりました。まず世田谷、狛江、調布、小金井各地域の実情、問題点について報告がありました。

その中のいくつかを記せば、

①小金井のくじら山原っぱに予定の第3調節池について作るという都の方針に変更はないこと。

②川辺の草刈の問題について行政もどうしたらよいか迷っているし、市民の側もトータルに話し合う場が必要。

③小金井第1調節池、第2調節池の利用について継続審議になっていた陳情が湧水を生かして小川と池を作る案を含めて一括採択されたこと。

④しかし何よりも注目を集め（ショックだった）たのは、調布基地跡地に建設を計画している下水処理場が差し迫った問題となっているという調布地下水を守る会からの報告だった。日量５２万トンもの排水が流入すれば（現在の水量は３０００～１万トン位）野川は大変貌をとげるだろうという議論の中で、その対応を含めて時間切れ次会に持越となった。次回の第３回準備会は１２月１日（日）狛江で開催されることになり、再会を約して散会となった。（文責、依田）